様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：６４４０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３４０１０５０

研究課題名（和文）東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動

研究課題名（英文）Community Movements in Mainland South East Asia

研究代表者
田辺　繁治（TANABE, Shigeharu）

国立民族学博物館・その他部局等・名誉教授

研究者番号：００００４５２６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　15,200,000円、（間接経費）　4,560,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近年、東南アジアで勃興しつつある、新しいタイプのコミュニティ（共同体）の実態を運動の視点から捉え、そこに参加する人々の想像力や情動、さらにそれを実現しようとする関係性や組織の解明を目指した。宗教、環境、医療、博物館、マイノリティなどを主な研究対象とし、運動の中の〈主体的経験〉の内容や〈共同性〉の特質などを分析した。そこでは、多くのコミュニティ運動が異質で多様な個人、集団や制度との〈アセンブレッジ〉（組み合わせ）として構成され、あるいはその中に接合していく実態のほか、そうしたアセンブリッジがコミュニティ運動特有の〈共同性〉とそこに付着する価値や倫理の創造に関係することも明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The main objective of this research project is to look at newly emerging communities in Mainland South East Asia from a viewpoint of community movement. In particular, the project intends to elucidate the imagination and the affect involved in their enterprises, as well as relational and organizational aspects of these movements. Individual research, which may focus on movements relating to religion, environment, medicine, museum or minorities, analyzes the contents of "subjective experiences" of the participants and the features of "communality" constructed thereby. In doing so, it is revealed that many community movements are constituted as "assemblage" (agencement) with multiple and heterogeneous individuals, groups or institutions, otherwise articulated within it. It is also demonstrated that such "assemblage" relates to creation of the "communality" and the associated values and ethics particular to the community movement.

研究分野：社会人類学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：文化人類学　社会学　コミュニティ運動　共同性　アセンブレッジ

１．研究開始当初の背景

本研究では従来の社会科学に見られるように、社会運動を近代市民社会に特有な現象と見るのではなく、伝統、近代、ポスト近代を横断する人類学的な研究対象として捉える。例えば、東南アジア大陸部においては古い時代から仏教的千年王国運動や、様々なユートピア運動が見られたが、今日のグローバル化する環境のもとでの類似した運動の展開にも注目する必要がある。他方、２０世紀末からのグローバル化の進展にともない、コミュニティ運動は、都市、農村を問わず、NGO、宗教、メディア、多国籍集団、行政機関、国際機関などとの接合によって多様な形態をとるようになった。こうした新たな形態のコミュニティ運動が出現する背景として、グローバル化の進展にともなう国民国家の変容、社会生活の不安定性や偶然性の拡大、市場原理を強く推進する新自由主義の台頭などを理解する必要がある。

そこで、今日のコミュニティ運動の多くはグローバルな変動との接合によって生まれる動的な編成、すなわち〈アセンブレッジ assemblage, agencement〉の中で捉えられるだろう。〈アセンブレッジ〉は異質な勢力、制度、個人、集団、モノや自然の組み合わせによって構成され、その構成部分は一定の自律性をもち、全体的統一性ではなく、個人や部分の潜在的力が大きな役割をもつ。コミュニティ運動は、こうした〈アセンブレッジ〉のもつ諸条件の中で、いかに人々がそこに参加し、共同的な関係を築きあげていくかを記述することで明らかにされなければならないだろう。

それでは、多様で異質な人々や集団を包み込み、それらの不安定な関係性のもとに構成される〈アセンブレッジ〉において、人々が変革のイメージを共有し、運動という集合行為を持続させる要因とはいかなるものだろうか。これまでの研究過程において明らかになってきたのは、新たなコミュニティにおける重要な特徴である内部の多様性、差異や個々人の潜在的力が、広く外部の人々や諸制度との交渉や協働をとおしてコミュニティそれ自体を改変し、新たな実践を生み出していく可能性を有しているという点であった。

また、コミュニティ運動を成立させるためには、参加する人々のあいだに一方ではそうした多様性、差異や潜在的力が、他方では〈共同性〉が確保される実態があるということが確認された。そこでこの研究は、コミュニティにおける新たな〈共同性〉の形成に注目する。それは個人や集合がその根拠自体を反省的に問いながら、新たな価値や倫理を作り出そうとする動きに関係している。コミュニティ運動の研究は、こうした価値創造や倫理の領域に踏み込むことによって、多様で異質な人々による新たな〈共同性〉の出現を確認することができるだろう。

２．研究の目的

この研究の目的は、近年、東南アジアにおいて勃興しつつある新しいタイプのコミュニティ（共同体）の実態を運動の視点から捉えることによって、そこに参加する人々の現在と未来に向けた想像力や情動、およびそれを実現しようとする関係性、組織や手段を人類学的に解明することである。

本研究では、このような新しいタイプのコミュニティ運動を、特に宗教、環境、医療、博物館、マイノリティなどにおける事例を取りあげながら、次のような特徴について分析検討を加える。

①新しいコミュニティ運動は異質で多様な人々によって〈アセンブレッジ〉として構成される。したがって、コミュニティ運動の〈アセンブレッジ〉がどのような個人、集団、制度との関係によって構成され、構成部分がもつ潜在的力がいかに顕在化して発揮され、また他の集団、制度や〈アセンブレッジ〉との関係によっていかに変動したかを明らかにする。

②新しいコミュニティ運動は、同質的なアイデンティティをもつ個人によって全体的目的実現を目指す従来の社会運動とは異なっている。そこでは相対的自律性を確保する個人の参加による〈主体的経験〉が、コミュニティ運動の方向性に大きく関与している。したがって個人が運動の中で欲望と想像力を解放しながら、自らの潜在的力を顕在化させていく過程を捉える必要がある。

③新しいコミュニティ運動は、同質的な個人によって構成される閉じられた共同性を特徴とする従来の社会運動とちがって、〈アセンブレッジ〉内外の他の集団や制度などとの接合をとおして新しいタイプの〈共同性〉が構築される。したがってこの研究は、そうした〈共同性〉の様態とそこに創造される価値や倫理について考察する必要がある。

本研究は、以上を主要な参照点としながら、タイおよびカンボジアなど東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動について、海外共同研究者との共同作業をとおして各地の事例を調査することにより明らかにしようとするものである。

３．研究の方法

代表者、分担者、および海外共同研究者各人が、対象コミュニティ運動に関するフィールドワークを実施し、それらの事例研究で得られたデータを比較検討しながらコミュニティ運動の実態を明らかにする。それらの対象とトピックは以下の 13 件である。

①北タイにおける仏教ユートピア・コミュニティ運動（田辺）
②北タイにおけるコミュニティ・フォレスト運動（松田）
③タイにおけるムスリムのダッワ運動（西

井）
④タイにおけるコミュニティ博物館運動（平井）
⑤帰還民によるNGOが作り出したアセンブレッジとその消失（阿部）
⑥北タイにおける民間医療復興運動（古谷）
⑦北タイにおける仏教僧ネットワークとNGO運動（岡部）
⑧タイ・テラヴァーダ仏教における女性運動（Apinya）
⑨山の所有者がやって来た―タイ・ビルマ国境地帯の宗教運動のアセンブレッジ（Kwanchewan）
⑩デトクシフィケーション―医療知識改革への実践（Malee）
⑪急進的代替教育―サンティ・アソークのシカ学校（Kanoksak）
⑫精霊の力を再活性化する―都市化する北タイの文脈における小農民の対立（Ariya）
⑬ゴジラと成る―ウボン・ラーチャタニーにおける反核運動（Surasom）

フィールドワークの推進にあたっては、年度ごとに共通の調査課題を設定した。１年目は、各地におけるコミュニティ運動における〈アセンブレッジ〉の構成を把握する。特に、国際機関、行政機関、NGOやメディアなどの異質な勢力、制度や集団による介入、連携あるいはそれに対する抵抗の局面を把握する。２年目は、運動をとおしてコミュニティ内部で形成されつつある新たな〈共同性〉に注目して調査を続行し、そうした〈共同性〉を支えている価値や倫理の内容を把握する。３年目は、主として補足的調査を実施することとした。

また、各研究者のフィールドワークと平行して、本研究の背景や主要概念を社会学的社会運動論と比較検討するために、２０１３年中には２名の社会学者を招聘して国内研究会を開催した。２０１３年３月７～８日には、タイ・チェンマイ大学において各自の研究経過を報告して比較検討するために海外共同研究者と共にワークショップを開催した。

最終年度２０１４年３月７～８日には、フィールドワークで得られたデータをふまえて全員が論文を提出し、タイ・チェンマイにおいてシンポジウムを開催した。そこでは関連分野の専門家４名をコメンテーターとして招聘し、タイとカンボジアにおける新しいコミュニティ運動における〈アセンブレッジ〉構成や〈共同性〉の意義について討議した。

４．研究成果

（１）研究の主な成果

この研究では、タイ、カンボジアにおけるコミュニティ運動が異質で多様な個人や集団を内包しながら〈アセンブレッジ〉を構成し、新しい〈共同性〉を形成していく過程に焦点をあてた。この研究の主な理論的、実証的な成果を、以下のごとく３項目にわたって提示してみる。

①アセンブレッジとしてのコミュニティ運動

この研究が対象とするコミュニティ運動とは、階級や民族という同質的アイデンティティを掲げて全体的で中央集権的な組織によって展開した１９７０年代以前の社会運動とはまったく異なっている。さらに本質主義的で集合的なアイデンティティに依拠した１９７０年代以降のフェミニズム、平和、ゲイ権利、環境などの「新しい社会運動」とも区別されるべきである。今日のタイやカンボジアなど東南アジアに勃興しつつある社会運動は、システムや構造、あるいはグローバル資本主義のような全体性を仮定するのではなく、異質で多様な個人や集団によって構成される〈アセンブレッジ〉の形態をとることが多い。

〈アセンブレッジ〉は異質な勢力、制度、個人、集団、モノや自然などの組み合わせによって構成され、その構成部分は一定の自律性をもち、全体的統一性ではなく個人や部分の潜在的力が大きな役割をもつ。〈アセンブレッジ〉概念は、間個人的ネットワークと制度的組織との関係性を説明する際に有効であり、ここで扱うコミュニティ運動にもあてはまる。それは国家の制度と連携して構成される場合もしばしばあり、この研究ではタイのコミュニティ博物館運動やコミュニティ・フォレスト運動などがそれにあてはまる。それらの運動は、ヒエラルキーと自己組織とのハイブリッドであると言ってもよい。

多くの〈アセンブレッジ〉はその内部に一定の自律性をもった部分を内包するが、その部分が他のアセンブレッジの部分として接合していることもしばしば見られる。北タイの隠者やヨギ（女性修行者）たちは同じ修行地の〈アセンブレッジ〉を構成しながら、別の仏教寺院や多様な宗教実践者などと連携している。また北タイの開発僧や民間治療師の場合も、主たる拠点とともにネットワークをとおして別の活動拠点と連携している点が注目される。

さらに組織論的な視点から強調すべきことは、〈アセンブレッジ〉という異質で多様な集合が、個人や部分がもっている「潜在的なるもの」を顕在化させる空間だということである。北タイの民間治療師、開発僧や隠者の場合でも、それぞれの〈アセンブレッジ〉あるいはネットワークの中の活動をとおして、それまで隠されたままになっていた力能や想像力が顕在化して新たな活動に発展することを確認することができる。またいくつかの新しいコミュニティ運動の中には、個人や部分のもつ潜在的力が政治的局面に活用される可能性を認めることも可能である。

②コミュニティ運動の中の主体的経験

異質で多様な個人や集合を内包しながら〈アセンブレッジ〉を構成するコミュニティ運動では、運動の参加者の主体的経験が重要であることが確認される。このことは、コミュニティ運動がしばしば経験運動として理解される側面をもつことと関連している。

コミュニティ運動においては、組織の集合的アイデンティティそのものよりも、参加者が他者と出会い、自らを探求し、変容させる過程がきわめて重要性を帯びている。その過程は、たとえば、北タイにおける仏教的ユートピア運動での隠者やヨギ、タイ－ビルマ国境地域におけるダッワ運動でのムスリム、タイにおけるデトクシフィケーション実践者、カンボジアNGO運動の中での被害体験をもつ人びとなどの事例に顕著に見出すことができる。

こうした、コミュニティ運動の参加者の主体的経験には、多くの場合、マイノリティがもつ周縁性が付与されている点にも留意すべきである。隠者やヨギ、比丘尼やムスリムは、男性比丘が圧倒的に優位なタイ上座部仏教社会における宗教的マイノリティとして、また開発僧ネットワークの僧侶や、タイ－ビルマ国境地域の宗教運動の参加者の大半は民族的マイノリティとして位置づけられる。彼らが運動に参加することで他者に出会い、それを通して自らの自己を探求するという点は、まさにコミュニティ運動が、同質的アイデンティティを掲げた中央集権的な組織による１９７０年代以前の社会運動や、本質主義的で集合的なアイデンティティに依拠する１９７０年代以降の「新しい社会運動」とは明確に区別される特徴となっている。

また、参加者の主体的経験がコミュニティ運動にとって重要性を帯びるのは、個々人の主体的経験が他方で〈共同性 communality〉の創出と密接にかかわっているからである。たとえば、北タイにおけるコミュニティ・フォレスト運動に見られるように、農村コミュニティとリゾートとの水利用対立の事例において、人びとは生活を守るために共同性を再想像し、その再想像された共同性をパーフォーマティブに共演することによって、グローバル化の暴力的作用に対する持続的な抵抗を生み出している。つまり、ここでは共同性を再想像するという主体的経験が、コミュニティの存続と防衛にとって重要な契機となっているのである。したがってこうしたコミュニティ運動は、自己とアイデンティティをめぐって展開する集合的行為としての社会運動として理解される必要がある。

③コミュニティ運動における共同性

今日コミュニティ運動は、必ずしも従来の社会科学が対象とした実体的なコミュニティを伴うものではなく、そこでは間個人的ネットワークや集団、制度などとの〈アセンブレッジ〉として構成される局面が重要となっている。したがってこの研究は〈コミュニティ community〉そのものを中心的対象とするのではなく、運動の中の個人、部分、集団などの間に形成される〈共同性 communality〉の解明に向けられてきた。

そうした観点から近年タイの農村部における、コミュニティ・フォレスト保護に連動する巨大ダム建設反対やリゾート開発反対などを捉えることができる。そこには多くの村落を巻き込んで、資本主義的開発やグローバル化へ抵抗するコミュニティ運動がしばしば見られる。それらの運動の中で追求されるのは、既存のコミュニティとその慣習そのものの復権ではなく、オルタナティブなコミュニティである。すなわち人々は伝統的な社会組織や慣習に依拠することによって巨大な勢力に対決しようとするが、それはたんに本質主義的に慣習に回帰しようとするのではなく、彼らはそれらを再想像して抵抗のツールに変換することをとおしてオルタナティブな〈共同性〉を作りあげようとする。また北タイの開発僧ネットワークにおいても、そうした再想像の過程を確認することが可能であり、そこでは仏法を用いて資本主義的開発に対するオルタナティブな〈共同性〉と価値を農民たちのあいだに構築することが目指されている。

このような〈共同性〉の構築においても、潜在性のもつ政治的可能性を確認することができる。いくつかのコミュニティ運動における〈アセンブレッジ〉の中では、多様な個人や集団が接触し、競い合い、助け合う中で既存の正統的仏教サンガ、資本主義的開発体制や国家的な制度や組織などに抵抗するオルタナティブな〈共同性〉が顕在化するのである。この研究の中では、イスラームのダッワ運動、北タイの隠者やヨギ、仏教僧ネットワークやカンボジアの帰還民NGOなどにその一端を垣間みることができる。そのような〈共同性〉は、個人の潜在性としての力能や想像力がきわめて大きな役割を発揮する場であり、ユートピア的衝動が噴出する場とも言えるだろう。

以上のように、この研究は、東南アジアにおけるコミュニティ運動の実態をそこに参加する人々の想像力や情動、またそこに展開する新たな組織的関係性や〈共同性〉を解明しようとする所期の目標を達成できたと考える。

（２）研究成果の国内外における位置づけとインパクト

この研究の最大の特色は、「社会運動」に代えて「コミュニティ運動」という独自の人類学的な視点を提示することにある。これは、「閉じられたコミュニティ」と「開かれた公共性」という対立概念のもとで近代市民社会における公共空間を前提とした運動をコミュニティの外に位置づけてきた、従来の研究枠組みを見直すとともに、公共性をも含みこ

んだ新しいタイプのコミュニティとその運動の実態を追究することを可能とする点において、高い独創性を有するものである。

この研究の最終段階である２０１４年３月７～８日には、タイ・チェンマイにおいてシンポジウムを開催し、分担者ならびに海外共同研究者から研究成果論文が提出された。いずれの論文も、タイとカンボジアにおけるコミュニティ運動に関する綿密なフィールドワークにもとづいて、運動が展開する中で異質な勢力、制度や集団が接合し〈アセンブレッジ〉を構成していく局面と、また運動の参加者の主体的経験を介して新たな〈共同性〉が構築されていく局面とを、同時に視野に収めた記述がなされている。こうしたミクロ・レベルの研究は、宗教、環境、医療などの多様な領域において、グローバル化の進行に伴って高まる政治的・社会的な流動性と不確定性の中で生きる人びとの〈生〉の理解を可能とする点において、東南アジア大陸部を対象とする人類学のみならず、今日の社会科学全体に対する貢献をなしうるものである。

なお、これらの論文は、シンポジウムにおける、４名のコメンテーターを交えた参加者同士の活発な討議をふまえて、現在、執筆者各人による修正がおこなわれている段階にある。すでに、海外の出版社とのあいだでは、２０１４年度内の刊行を目指した出版計画が進行中である。刊行が実現すれば、この研究の成果を、より広く社会に公開することが可能となる。

（３）今後の展望

この研究が解明したことは、東南アジアにおけるさまざまなコミュニティ運動に参加する人々の想像力や情動、またそこに展開する新たな組織的関係性や〈共同性〉であった。とりわけ、コミュニティ運動が異質で多様な個人、集団や制度との〈アセンブレッジ〉（組み合わせ）として構成され、あるいはその中に接合していく実態のほか、そうしたアセンブリッジがコミュニティ運動特有の〈共同性〉とそこに付着する価値や倫理の創造に関係することも明らかになった。では、このようなコミュニティ運動の中で、いかなる〈社会性 the social〉が社会変革のイメージとなるのか、またどのようにして社会変革が実現されるのか。現時点では、これらの点はこの研究において十分検討されていないが、コミュニティ運動がそれを取り巻く社会に対して与えうる影響力についても考察および分析する必要があるだろう。

また、東南アジア大陸部以外の世界各地におけるコミュニティ運動との比較をおこなうことによって、コミュニティ運動という視点の有効性を検討することも、今後に残された課題として指摘したい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

ABE, Toshihiro, “Perceptions of the Khmer Rouge Tribunal among Cambodians: Implications of the Proceedings of Public Forums Held by a Local NGO”, South East Asia Research, 査読有, vol.21, no.1, 2013, pp.5-26.

平井京之介、「タイのコミュニティ博物館についての一考察－博物館か、寺院か？－」、『国立民族学博物館研究報告』、査読有、37巻３号、2012、pp.281-310。

古谷伸子、「タイの医療システムにおける民間治療師の位置づけと正当性」、『哲学論集』、査読有、58号、2012、pp.20-35。

〔学会発表〕（計28件）

TANABE, Shigeharu, “Hermits of the King's Mountain: a Buddhist Utopian Community Movement in Northern Thailand”, the Symposium “Community Movements in Mainland South East Asia”, March 8, 2014, Lanna Resort, Chiang Mai, Thailand.

HIRAI, Kyonosuke, “The Development of Community Museums in Thailand since the Late 1980s”, the Symposium “Community Movements in Mainland South East Asia”, March 8, 2014, Lanna Resort, Chiang Mai, Thailand.

ABE, Toshihiro, “The Ebb and Flow of Assemblage in Cambodian Non-governmental Organization (NGO) Movements: the Case of Human Rights Initiatives Led by Diaspora-Returnees on the Khmer Rouge Tribunals”, the Symposium “Community Movements in Mainland South East Asia”, March 8, 2014, Lanna Resort, Chiang Mai, Thailand.

KOYA, Nobuko, “Folk Medicine Revival Movement in Northern Thailand: the Legitimation of Healers”, the Symposium “Community Movements in Mainland South East Asia”, March 8, 2014, Lanna Resort, Chiang Mai, Thailand.

NISHII, Royoko, “Muslim Community in Mae Sot: Transformation of Da'wa Movement”, the Symposium “Community Movements in Mainland South East Asia”, March 7, 2014, Lanna Resort, Chiang Mai, Thailand.

OKABE, Mayumi, “Making Sense of the Buddhist Monks' Network as a Community Movement in Contemporary Northern

Thailand", the Symposium "Community Movements in Mainland South East Asia", March 7, 2014, Lanna Resort, Chiang Mai, Thailand.

MATSUDA, Motoji, "Towards Articulation of Permanence and Fluidity of Community: a Challenge of Life-pragmatism", International Workshop on "Community Movements in South East Asia", March 7, 2013, Chiang Mai University, Thailand.

古谷伸子、民間治療師ネットワークの形成と治療師の正当化－北タイ・チェンマイ県の事例から－、日本タイ学会第 14 回研究大会、2012 年 7 月 7 日、大阪大学。

阿部利洋、「カンボジア特別法廷とローカル・オーナーシップ－NGO フォーラムを事例として－」、日本社会学会研究大会、2011 年 9 月 17 日、関西大学。

OKABE, Mayumi, "Beyond Localities: Community Development and Network Construction among the Buddhist Monks in Northern Thailand", the 11th International Conference on Thai Studies, July 27, 2011, Mahidol University.

〔図書〕（計 14 件）

TANABE, Shigeharu, "Kho khit hen rueang ton bun latthi phra sri an lae latthi fuen fu satsana nai Lanna（北タイにおけるトン・ブン、千年王国主義、仏教復興主義に関する覚え書）", in Kwanchewan Buadaeng and Apinya Fuengfusakul (eds.) *Phithikam lae patibatkan nai sangkhom chao na phak nuea khong prathet Thai*(北タイの農民社会における儀礼と実践）, The Center for Ethnic Studies and Development, Chiang Mai University, Thailand, 2013, pp.101-110.

西井涼子、「動員のプロセスとしてのコミュニティ、あるいは「生成する」コミュニティ－南タイのイスラーム復興運動－」、平井京之介（編）『実践としてのコミュニティ－移動・国家・運動－』、2012、pp.273-309。

阿部利洋、「帰還者が喚起するコミュナリティー－カンボジア特別法廷における被害者カテゴリーの創出－」、平井京之介（編）『実践としてのコミュニティ－移動・国家・運動－』、2012、pp.311-336。

６．研究組織

(1)研究代表者

田辺　繁治（TANABE, Shigeharu）
国立民族学博物館・その他部局等・名誉教授
研究者番号：00045262

(2)研究分担者

松田　素二（MATSUDA, Motoji）
京都大学・文学研究科・教授
研究者番号： 50173852

西井　涼子（NISHII, Ryoko）
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
研究者番号：20262214

平井　京之介（HIRAI, Kyonosuke）
国立民族学博物館・研究戦略センター・教授
研究者番号：　80290922

阿部　利洋（ABE, Toshihiro）
大谷大学・文学部・准教授
研究者番号：90410969

古谷　伸子（KOYA, Nobuko）
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員
研究者番号：20514326

岡部　真由美（OKABE, Mayumi）
国立民族学博物館・特別研究員（PD）
研究者番号：40595477
（平成 24 年度より研究協力者）

(3)海外共同研究者

Apinya Feungfusakul
Faculty of Social Sciences, Chiang Mai University

Kwanchewan Buadaeng
Faculty of Social Sciences, Chiang Mai University

Malee Sitthikriengkrai
The Center for Ethnic Studies and Development, Chiang Mai University

Surasom Krisanajutha
Faculty of Humanities, Ubonratchathani University

Witoon Buadaeng
Ethnographic Film Maker

Kanoksak Kaewthep
Faculty of Economics, Chulalongkorn University

Ariya Svetamra
Women's Studies Center, Faculty of Social Sciences, Chiang Mai University